

「入試英作文」の抱える問題点

—『入試必携英作文』発行にあたって—

竹岡 広信

英作文に本格的に関わって随分と時間が経ちましたが、ここ20年以上もの間、四苦八苦する中で最近ようやく英作文が何かがうっすらと掴めてきた気がします。

この20数年間は「疑いの歴史」と言っても過言ではありません。20歳前半の頃は、自分が習ってきた英語に疑問を抱くようになりました。20歳中頃英語学を本格的に原書で学ぶようになって、市販の参考書、問題集に疑問を抱くようになりました。そしてその頃同時に、それまで疑うなんてあり得なかった英和辞書の記述に疑問を抱くようになりました。日本に來ている英米人の英語にも個人差があり、全面的には信頼を寄せることはできないと悟ったのは30歳半ばのことでした。にもかかわらず、入試問題に登場する「英作文」の和文そのものに疑問を抱いたのは、拙著「竹岡広信の英作文が面白いほど書ける本(中経出版)」の元となる、十数年分の大学入試問題の分析を開始して、ようやくのことでした。

その当時、あるアメリカ人の先生と毎週入試問題の英作文について3時間ほど話し合いました。そして「日本文自体の整合性を疑う必要」を明確に認識するようになったのです。

日本人として入試問題の英作文に接すると、何ら違和感なく受け入れられる和文も、いざその論理を考えてみると、到底受け入れられないものがあることに気がついたのです。

このたび数研出版から英作文の本を出版させて頂くことになりました。この本はおそらく私の「入試英作文」の集大成的な性格をもつものになると考えております。今までの本では語り尽くせなかったことを思う存分に凝縮したつもりです。答案は生徒の目線に立ったものみにし、特に論理性や自然さを重視しました。書名の「必携英作文」の名にふさわしいものになったと自負しております。

さて、今回のこの記事では、その「必携英作文」に

掲載するはずだった、「ボツ」になった入試問題を取り上げ、なぜ「ボツ」にせざるを得なかったかを検証してみたいと思います。言ってみれば「楽屋の裏話」のようなのだとお考え下さい。

例1

公共の場所や教室では携帯電話のスイッチを切っておくのが礼儀です。 [滋賀大]

これは you を主語にする例として選んだ入試問題です。最初の選別段階では、岡田委子先生(「必携英作文」の共著者)と共に、それほど問題を感じませんでした。ところが、イギリス人デイヴィッド先生を交えて、話し合いをしましたところ論理のほころびが見えてきました。

[初期案] In public places and the classroom, you should switch off your cellular phone.

デイヴィッド先生が上の英文を一読して“Strange!”ふだんは、悪くても“A bit strange.”で済むのですが、完全に「おかしい」との指摘です。

まず彼が言うには「公共の場所で携帯を使えない場所をあげてみてよ」。私が答えて「電車の中とか、バスの中とか、飛行機の中とか、市民会館とか、いくらかもあるよ」と言いました。すると「公園とか駅の構内とか携帯を使ったらダメなのか?」と逆襲。「公共の場所」が大問題です。日本語で読んでいる時には、さほど問題がないように思えます。それはおそらく「公共の場所すべてには当てはまらないとしても、何となく正しい感じがするから」ではないでしょうか? 結局、some public places とすることになりました。

さらに「教室はおかしくない?」とデイヴィッド先生。私としては彼の言っていることが意味不明で「どうしてですか?」と尋ねますと、「教室は公共の

場所ではなくて、私的な場所でしょ！だって公共の場所というのは誰も制限なく出入りしていい場所のことをいうんだよ。教室なんて誰かれなしに入室できるわけないでしょう」。言われてはじめて納得しました。教室は a private place だったわけです。嗚呼。ですから public places とするだけでも文として整合性がないのに、classrooms を並列したものだから、およそ論理性のないものになってしまったわけです。以上のような議論の末に、この英作文はボツが決定しました。

例 2

学校では、50 人近くの生徒が一斉に授業を受けるので、全員が授業を完全に理解するのは不可能に近いと思います。 [武庫川女子大]

これは「～は…(形容詞)だ」の問題演習として使うつもりでした。当初の案では、以下のものが模範解答でした。

[初期案] In Japan, there are nearly [almost] 50 students in one class, so it is sometimes [usually] impossible for all of them to understand the class.

これも何の問題もないと考えていたのですが、デイヴィッド先生から「50 人近くの生徒がいるから、全員が理解するのが不可能、という論理がわからない」と言われました。そして改めて考えたところ、「日本では特に、義務教育の小学校や中学校では、能力別のクラス分けはしていないので、様々なレベルの生徒がいる。よって、教師によほどの力量がなければ全員に理解させるのは不可能だ」という意味だと思ふと伝えた。それと同時にわかったことは、高校や大学となると話が別で、一定の入試を突破してきた生徒たちが「理解できない授業」というのは他ならぬ教師の責任以外にはあり得ない、ということに気がついたわけです。

そこで、もしこの英作文を「まとも」なものにするためにはどう変更すればよいか考えた結果が次のものです。

[改善案1] In Japan, there are nearly [almost] 50 students in one class, so it is sometimes [usually] impossible for all of them to ask questions [for teachers

to monitor everyone].

[改善案2] In Japan, nearly 50 students have a class together, so it is impossible for teachers to treat [to speak to] them individually.

しかし、これを模範解答とすると問題集を使用した生徒たちから大ブーイングが聞こえてきそうだったのでボツとしました。

例 3

日本人が外国で暮らし始めるにあたって安全を最も気にするのは当然だ。 [愛知教育大]

これも「～は…(形容詞)だ」の問題演習として使うつもりでした。当初の案では、以下のものが模範解答でした。

[初期案] It is natural for them to [It is natural that they (should)] worry about their safety if they move abroad [move to another country / move overseas].

ここでもデイヴィッド先生から「意味不明」という「ダメだし」がありました。つまり「なぜ安全を最も気にするのか」がわからないということでした。日本人が上の日本語を読んだ時にはそれほど違和感はないと思います。それはたぶん、「日本は世界で最も安全な国の1つである」という前提があるからだと思います。ところがこの前提がないとよくわからない文になってしまうわけです。

もし相手に伝えるために英作文をするなら次のようになるわけです。やはり、ボツにしました。

[改善案] For most Japanese people, Japan is the safest country in the world. That is why [Therefore,] they are naturally worried [concerned] if they move abroad.

こうした例から「英作文」は、「誰が誰に何のために言うのか」を明確にした上で、外国人の目線に立って論理性を重視したものにする必要があることを改めて認識しました。

例 4

経済のことを論ずるときには、かなりの想像力が必要とされる。私たち日本人はいま、い

くつかの不満はあるとしても、基本的には非常に快適な暮らしを享受している。

しかし世界の中では、いまだに多くの人々が食料不足に苦しんでいる。それにもかかわらず私たちは、その事実を目を向けず、自分の幸福のみを追い求めがちである。[北海道大学]

先日、生徒が上の問題をもって質問にきました。「先生この日本語の中にある『経済』は economics ですか？それとも economy ですか？」。しばらく考えて、「どちらでもないよ」と言うと、その生徒は怪訝そうな表情をして「どういうことですか？」と尋ねました。そこで、その生徒のノートを見せてもらうと、In order to discuss ~, we need a lot of imagination. と書いてあり、~のところだけが空所になっていました。

「君は作文好きですか？」と尋ねると「あまり好きではありません」とのこと。なぜこの子は作文が好きになれないのでしょうか？答えは簡単です。この子は「訳す」ことに必死になっていて、英作文を言語活動ととらえていないからです。

では改めて先ほどの英作文を分析してみることにしましょう。まず「誰が誰に向かって言っているのか」を考えてみます。まずこれから始めないといけません。この文は簡単ですね。日本人が日本人に語りかけているようです。

さて、文を最後まで読んで、もう一度、この文の言いたいことを考えてみます。

論点は次の4点に絞れます。

1. 経済のことを論ずるには、かなりの想像力が必要だ。
2. 日本人は非常に快適な暮らしを享受している。
3. 食糧不足で苦しんでいる国がある。
4. 日本人は2. の現状がわかっていない。

まず、主張は、「日本人は、食糧不足で苦しんでいる国があることをわかっていない」です。そして、その理由は、「日本は食料は十分にあるから、食料不足の国があることが想像さえできないからだ」です。すると、2. の「快適な暮らし」というのは「食料が十分にある暮らし」だとわかります。すると、1. の「経済のこと」とは「食糧不足で苦しんでいる国の経済事情」のことだとわかります。以上のことをふまえて、例4をもう少し論理的に整合性のある文に変

えてみましょう。

例4の改善案

世界には食糧不足で苦しむ国がいまだに存在するが、食料がありあまるほど存在する国に住む日本人には、そうした国の悲惨さが想像できない。

[改善案] Since Japanese people have too much food, they cannot imagine that there are many countries that don't have enough food.

このように、文全体の言いたいことを考えて英作文をすると、「この文の『経済』をどのように訳すのですか？」という問いが、いかに空しいかがわかります。同様に「快適な生活」を a comfortable life としても、ピントがずれていることがわかります。

さらに、この文の主張を明確にすると、「日本人は食べ物を粗末にしないようにすべきだ」となりますから、結局、次の英文で言いたいことは十分に伝わると思います。

[改善案] Japanese people should not waste food.

この北海道大学の問題は元々、「必携英作文」に入れる予定はなかったのですが、「英作文とは何か？」を考えさせてくれる問題ですので敢えて取り上げてみました。

昔から「なぜ日本人は英語が話せないのか？」という問いが何度も何度も繰り返されてきました。この問いの是非も含めて意見はたくさんあるかと思いますが、この答えの1つは「英作文が苦手だから」ではないでしょうか？「英語を話す」というのは「瞬間英作文」ですから、話すことができるようになるためにも、英作文の指導にこれからますます重点をおくことが必要であると痛感しています。

(駿台予備学校講師
洛南高等学校講師
竹岡塾主宰)